

2010年6月25日

京都新聞／夕刊2面

現代のこぼれ

やまだ
山田 玲子

自然科学の研究者は、女性より男性の人数が圧倒的に多い。私の所属する米国の学会では、女性のための昼食会が催され、若い女性研究者が、彼女たちにとっては雲の上の存在である著名な女性研究者と交流する機会が与えられる。しかも、その場で、若手が学会員になるための推薦状に学会の大家である彼女たちが推薦者となりサインをする。女性研究者を鼓舞するため、米国ですらこういう努力をしているのだ。

子供の頃、将来何になりたい

かと先生に問われると、女子の回答はお花屋さんやパーマ屋さんといった現実的なものがあったのに対し、男子は火星の探検とか、タイムマシンで未来に行ってみたいなどという現実味の薄い回答が多かったように思う。この男女差が何に由来するかはさておき、現在、私の周りには、音声認識やロボットを開発している男性研究者が多いが、彼らの多くは「2001年宇宙の旅」にでてくる人間と会話するコンピュータや、漫画の「鉄腕アトム」にあこがれた

研究者の夢と不安

少年たちであり、それらの実現という夢に近づくために研究の道歩んだことは想像に難くない。私は女子の典型で、夢は鉄腕アトムのお嫁さんになることだったし、「2001年宇宙の旅」を見ても、HALのような人工知能を作ろうという気など起らなかった。では、何故研究者になったのか。キュリー夫人への憧れがあったように思う。研究をやり通した生き方に感銘したのだ。また、今では想像も出来ないが、大学生の時に乗車したタクシーの運転手さんが、通っていた大学の先生で、生活のためにアルバイトをしておられた。この出来事も、私の研究者へのストイックな憧れに拍車をかけた。研究者とは、屋

台を引いても好きな研究ができることに幸福を感じる、そんな浮世離れた人々で、実験の結果を見る瞬間が至福の時なのである。

一方、研究の継続には、研究費の獲得が不可欠だ。実は、これがなかなかつらい。「この研究をやったら5年後に何がわかるのか」と言われても、研究とは「わからないこと」を調べるもので答えがわかっているなら研究する必要はないではないかと、偶然が大発見につながった例はいくつもあるなど、へ理屈をこねたくなる。しかし、景気低迷のこのご時世では、すぐに役に立ちそうにない研究分野は肩身が狭く、研究者にとって幸福と苦悩の入り交じった日々が続く。

男女を問わず「勉強」の好きな者が研究者になるとは限らない。自らの内面から湧き出る好奇心に加え、幼少時代に触れた情報や作品に夢を馳せて学究の道を進むことが少なからずある。日本には言論の自由があり世論がある。しかし、伝わってくる情報がマスメディアによる一面的な意見に流されているような気がしてならない。そのことが、子供たちが自らの夢を膨らませる機会を妨げてはいないだろうか。科学技術の進歩は一夜にしては成らない。事業仕分けを見ていると、納税者としての納得とは別に、研究者としての漠然とした不安を抱えてしま

う。

(ATRAリーディングテクノロジー協会会長)